

第一三二回

越谷市郷土研究会 研究発表会

平成一四年六月三十日

平田篤胤国学

と

越ヶ谷

長右衛門・おりせ

佐藤久夫

草加市文化財保護審議会会長
元越谷市史編集委員
元越谷市郷土研究会理事

長右衛門・織瀬（おりせ）を視点に

日 次 （はなしの進行）

はじめに

I 古史徵「序」と「開題記」

II 越ヶ谷国学者と平田門人

I 名主層越谷国学者

(1) 渡辺政之助荒陽

① 渡辺源太左衛門彌彌

② 村田芳樹尼多勢子

(3)(2) 江沢太郎兵衛昭融
福井権右衛門猷貞

2 越ヶ谷商人平田国学門人

(1) 山崎長右衛門篤利

(2) 小泉市右衛門安輝

(3) 町（松）山善兵衛正理

関係系図 …… 篤胤学芸遍歴 …… 8

III 篤胤と長右衛門家交流

(1) 資金援助

(2) 篤胤の妻おりせ

IV 平田国学の近代教育

(1) 庶民教育の嚆矢

おわりに

はじめに

「べんきょうしろよ」、勉強つてなによ、べん「勉」も、きよう「強」もいやなことを無理にでもさせることだという。親はなぜ子供に勉強しろ、べんきょうしろというのだろうと子供はいう。おもしろくも必要とも思わないからである。

読み書きのできないことがどれ程生活の上で不便で、損で、恥ずかしいことか、思い知らされたとき勉強なる学問のある人、学問することのできる人、できる身分、本を買うことのできる人が羨ましいと感じる。人（私）は、死ぬ頃になつて自分の知識・技能の未熟さに感じ、遅過ぎながら金と時間を知らないことへの挑戦を思い立つものだ。

べんきょうて何をすることか、値段を切るのも勉強だ。平田篤胤という方は、「外国の言葉や文字を習う前に、自分のくにの文字や言葉、いうなら日本語、日本文字を学んだらどうだといつてはいる。江戸期の庶民「士農工商」の身分社会では、武士以外は、日本の文字、ことばの読み書きすらまなぶ、ならう、書籍を手にすることすら容易なことではなかつた。

勉強・学問をしてはいけない頃のことを、義務教育以前の「まなび」について越谷の人は、どうして手紙を読み、ラブレターを書いたかを振り返つて見ることもたまには、大切なことかも知れない。私がこの地に教員として赴任した頃は、本家の子が進学しないのに「いもち」のおらが進学できるかいといわれたのもつい最近のことだ。勉強は、するなどいわればしたくなるものらしい。

江戸時代の最下層の越谷の町人（職人・商人）が勉強・学習した「平田国学」に私が奉かれたのは、山崎長右衛門ご家族の順子先生・祐子先生と中学校で一緒にさせていただいた折、平田篤胤の書簡を見せていただいたことにはじまる。いまより三十余年も以前のはなしである。篤胤の書簡と多摩の阿伎留神社に伝わる伴信友の書簡の「鹿占い」との話から、中国の「龜ト（きばく）」に対し「鹿ト（ろくばく）」を日本文字の原点だといふことから「日本文字」に興味をもつたことにはじまる。それも遠い昔のことで今更人様にお話できるようなものではない。が、こんな私のまとめたものが越谷市長さんの目にとまり、高崎先生の遺蹟発掘の研究の片わらに「越谷市史」をはじめる契機にもなつたともきかされた。また多くの方々にお世話になつてきたことを思えば、恥を忍んで演壇にたち、拙文を寄せる責任を感じたところです。

此の度は、篤胤の第3人目の妻「おりせ」にも焦点をあて、篤胤と越谷の人々との私的台所交際を見るなかで神道国学者篤胤とは別の庶民教育者「篤胤」を覗いてみたいとおもいます。

I 十日史徵「序」と「開題記」

1 古史徵（こしちょう）平田篤胤（ひらたあつたね）の著書、文政元年（一八一八）出版。

古史とは、日本の古代書。篤胤は「古事記」と「日本紀」をあげている。徵（ちょう）は解説。学習は日本の書物、特に古事記と日本紀を学ぶことが第一である。神代（上代）の二書にも差異がある、ましてその他の書の日本歴史のはじまりは多種多様である。神の名も、起こそも「古事記」と「日本紀」と「祝詞（のりと）」の三大史書でも大きな違いがある。学習は、日本文字、日本のことば、を知ることが大事。外国のことを学ぶことより自分のくせの「ことば」を、もじ、を知ることの大切さを著わした。

古史徵の序文の著者が

古史徵序
上つ御世のをしへ語に・・・

文政元 武藏ノ国埼玉ノ郡越谷ノ里人 山崎長右衛門 篤利

2 古史徵一春の巻

〔開題記目録大意〕山崎篤利謹記

3 古史徵二典の論上三

〔天地あめづち以前にほん文字あり、上古之世未有文字云々宿称。空海の以呂波字・・・〕

4 古史徵三典の論下四

〔古事記と日本記の差異から〕姓と氏

5 古史徵一冬の巻

〔開題記目録大意〕山崎篤利謹記

○上ノ件三典に添読べき書等の論下七

〔格式・弘仁式・貞觀式〕

○神魯岐・神魯美、伊邪那岐・伊邪那美、国生み

◎越ヶ谷商人 油長のあるじ 長右衛門はどうして 平田篤胤の著書に 序文 と 解題 をしるしたのだろうか

II 越谷国学者と平田門人

江戸幕府のご用学の儒学「漢学」（朱子学）。これを預かる「林家」の学舎を「正学」とした。朱子学以外の学問学派は、儒学であつても異学（いがく）とした。まして国学、蘭学（洋学）は禁忌された。しかし、学問というより生活上の読み書きの必要から学習への意欲は幕末になるに連れて高まっていた。庶民の学習の場としての「寺子屋」も支配者としての名主等村役人層の朱子学的塾と、町場には生活に役立つ読み書き塾が盛んになつた。商家の子弟は、手習い・読み・珠算・いがれかをまなんでいた。豪商の旦那の学芸は。

1 名主層の國學者

(1) 恩間（大袋村）の渡辺玄禄荒陽（わたなべげんろく・こうよう）
（名之望・字万夫・政之助・学舎時習堂）

宝暦二年（一七五二）大袋村の名主の家に生まれる。寛政二年（一七九〇）田畠、名主役を捨て江戸へ出て学者を志す。日本橋に「時習堂」学舎を開く。篤胤門人にもなつたのは、越谷町三商人門人より以前の文化十一年（一八一四）六十三歳のときであるが、篤胤と仲たがいして国学者を名乗らず、儒学・漢学として江戸に学舎をはつた。

① 渡辺源太左衛門 珮（みつる）は、荒陽の子息。父と共に江戸にでる。三十五歳にして、父と同様（文化十一年）に平田篤胤の「真音乃屋（舎）」に入門している「柳原家中」。学舎は、父玄禄・荒陽の漢学の跡を継いでいる。

② 村田多勢子（むらたたせこ）『芳樹尼』は、渡辺荒陽玄禄の次女。

幼い身ながら、父渡辺政之助（後の荒陽）に同道して、江戸に出て、国学と和歌が奇縁で国学者村田平四郎春海に請われて養女となつた。幕末女性国学者歌人として活躍した。著書に『芳樹和歌集』等を残している。

※ 「平田篤胤の研究」なる大書を著わした渡辺刀水（金造）『伝記学者・陸軍中将』は、親戚という。金蔵は、軍人であるが、伝記学者刀水は、自らも言うように、資料に忠実な考証伝記学者であつた。（伴信友等考証学国学）。「渡辺刀水所蔵資料の行方は、終戦後不明のままとなつていて。」

(2) 大沢の名主

- ① 江沢太郎兵衛昭融（じょうゆう）『大沢古馬館』を残す。
② 福井権右衛門猷貞（ゆうてい）『大沢猫の爪・越ヶ谷瓜の蔓』を残す。

2 越ヶ谷商人平田国学門人

- (1) 山崎長右衛門篤利（やまざきちょうえもんあつとし）
(2) 小泉市右衛門安輝（こいずみいちはんやすてる）
(3) 町（松）山善兵衛正理（まちやまぜんべいまさと）

平田篤胤は、安永五年（一七七六）に、秋田久保田城下の大和田清兵衛の四男として生まれた。寛政十二年（一八〇〇）二十五歳のとき平田藤衛門の養子となり、大和田から平田姓を名乗ることになった。間もなく学者を志して江戸へ出、国学一派の「真菅乃屋」の家号で開業した。文化元年（一八〇四）である。このとし江戸の職人あさりやと建具やが最初の門人となつた。篤胤は、職人・商人の「町人」層を対象に学舎の経営を始めた。もう一つの対象門人が「神職」であった。江戸の近郊門人獲得のため香取鹿島社へ参詣したのは、文化十三年（一八一六）。この旅によつて門人八七人の大量をかくとした。この時門人になつた松戸の商人「綿や」小島彦八、「のちの彦右衛門」の紹介で平田学舎（「真菅の屋」改め「伊（氣）吹舎」いぶきのや）に入門したのが越谷商人門人の三人である。

平田篤胤

○土屋清造 ○富直利

吉岡茂吉

○小島彦八

○山崎長右衛門篤利

（後彦右衛門）

○小泉市右衛門安輝

香取宇内

○町山善兵衛正理

平田門人帳
(授業門人姓名録)

山崎篤利 「文化十三年」

五十二歲

因懇願与一字
篇和

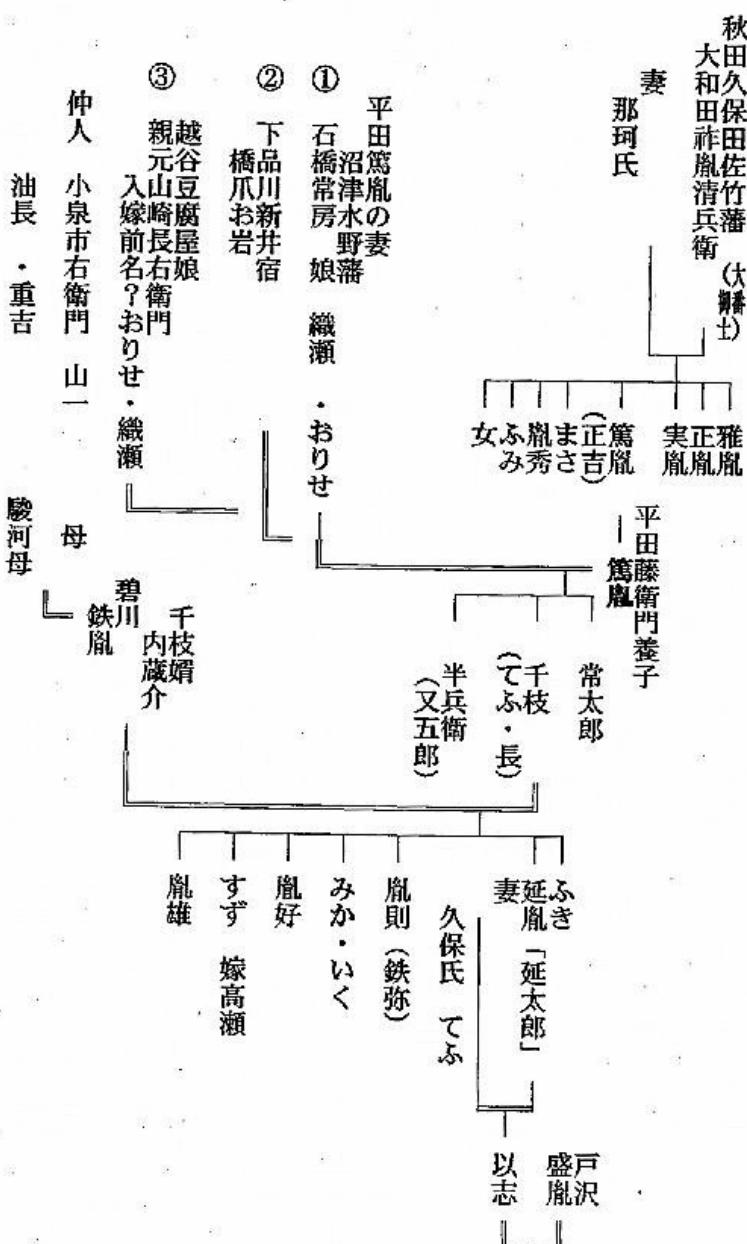
小泉安輝
「文化十四年」

安
蟬

町山正理
埼玉郡越谷 小島元吉紹介

小早川右衛門 安瀬
町山善兵衛 正理

篤胤の妻 「おりせ・折瀬・織瀬」



久保田・佐竹義重

安永 5 一七七六 生

天明 3 一七八三 八歳

漢学 中山青義

天明 6 一七八六 一一

医術 大和田柳元

寛政 7 一七九五年 二〇
亨和 元 一八〇一 二六平田藤兵衛・山鹿流軍学者
(妻を迎える・両養子)

玄瑞 (孫)

切弓 江戸へ出て学問で身を立てる覚悟

柳生流

梅津外記・小田野又八郎
大和田助之丞

日置流

小野岡市太郎

門弟

平田四大人 荷田 (羽倉) 春満 (かだあづままる) · 賀茂 (岡部) 真淵 (かもまぶち) · 本居宣長

「私は（渡辺金蔵）平田篤胤翁の許可を得て、平田家裏蔵の文書を閲覧することを得た。それは、私が先年、武州越ヶ谷町山崎長右衛門は『古史徵開題記』を書いた山崎篤利である。此の家には篤胤の書簡、借用証文、その他の種々の文書器物が保存せられていて、此等の文書を閲覧することに迄進んでいたのである。平田家の文書は余程以前に維新史料偏纂官に見せた事があつて、維新史料偏纂官に見せた事があつた。私は別に副本も作らず、其の儘平田家へ返却し、爾來誰も見る人もなく、紙魚の腹を肥やしつつ、鐵胤は篤胤及びおりせの手紙は、月日の順序に一通も失わずチャント整理してあつた。

『古事記』くに産み
天 (あめ) · 地 (ち · くに) 自然が出来る。人 (命) は、どう創られた。独身命は、一代限り。おのごろ嶋 で

「いざなみの命に問う、汝の身は、如何なるか？吾が身は、成りなりて、成りあわざるところ一処もあり。ここに、いざなぎの命い。我身は、成りなりて成り余れる処一処あり。我身の成り余れるところに、汝の成りあわざるところにさしふさきて、国土 (くに) うまん如何に、伊耶那美命答えて然善けんと。吾と汝、天の御柱を廻り逢わん、いざなぎの命まず言う あなたにやし おとこお。後に いざなぎの命いう あなたにやし愛 おとめお · ·

III 篤胤と長右衛門家交流

(1) 資金援助

山崎長右衛門篤利が、平田大角篤胤から他の越谷門人とは異なつた厚遇を受けたのは既に（Iの項）見てきたように、篤胤の著述の出版に莫大な資金援助にあつたといえる。文化十四年松戸の綿や小島彦八元吉の口利きで長右衛門が平田篤胤の門「真音之屋」を改称したばかりの「伊（気）吹舎」に入門した直後から資金援助が始まっている。

書簡資料1〔文化十四年九月二十一日伊吹舎より長右衛門宛〕「世話人伊助」

〔平田大人著神代系図近々すり出しに相成り候に付き・・金六両ほど不足にて、差し支えに相成り候に付き御地御門人方え御無心差し上げ申し候。大方貴君様へは別段御出情相應可申哉にも候。何卒無余日返金為致申候間・・・〕

文化十四年十一月二十五日 今朝先生（篤胤）越ヶ谷へ御出、伊助（平島）御供（日記鉄胤整理）

十二月三日 越ヶ谷よりお帰り、上首尾のよし（日記）

文化十四年十二月 玉真柱摺立て代金二九六両を用立て〔二十両宛渡す〕

文化十五年（四月文政元）

〔一八一八・篤胤四三歳〕

正月十日 越ヶ谷 より 金二十両受け取り、これ以後度々御受け取り

十五日 古史徵彫刻初まる（日記）

二月十六日（靈みはしら 写し）「天御中主は男か女か（篤利）」「男女かねたる御神にていとも妙なる御いはれあり、くわ

しく古史伝に記せり（篤胤）六月お千枝様 赤の飯出来（十四歳）

十月十二日 伊助越谷より帰宅、二百九十六両と取り決め十三両持參、皆済ともうす

十一月十六日 ご縁女に付き（おりせ）へ御結納遣わされ、十八日御引取

十二月二日 今晚御婚儀 伯父浅草三や瀬戸物や伊勢や市兵衛

借用申金子の事 一金十五両也 但通用金也

右ハ玉真柱摺り立て入用為御助成借用申す処 実正也

返済の儀ハ壱ヶ月二十五

兩壹分之利足相加え 来る寅三月二十日迄取り立て

元利取り揃え急度可致返辨候 為後日証文

仍如件

文化十四年十一月十日

平田大角

山崎長右衛門殿

借用申金子の事 一金二百九拾六両也

右ハ玉真柱摺り立て入用為御助成借用申す処 実正也

被下候一万一為金子返納に能わず候ハ板木不残取り揃え貴殿方え御引取摺り立て本書肆え御完渡被成其の利分にて元利相済次第に可被成板

木ハ此の方え御渡し可被下候尤も此の度摺り立て相済候上ハ直ちに板木御預ケ申し候ても不苦候

此の儀ハ御勝手次第に可被成板

候為後日仍如件 証人平島伊助

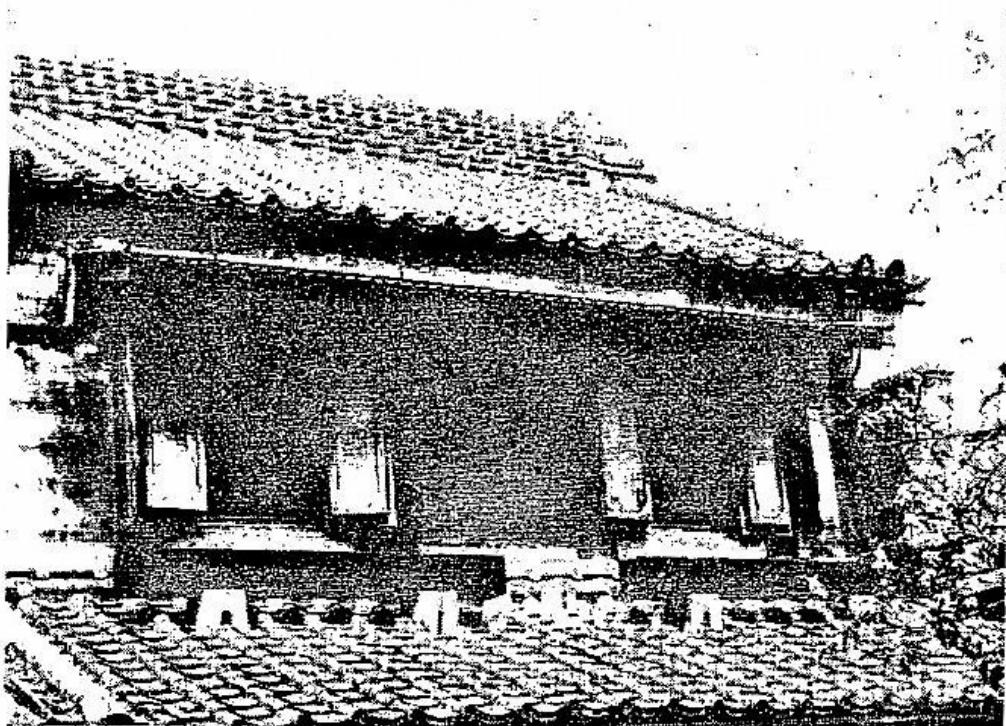
平田伊助

借用 人 平田 大角
文政元戊寅正月十日被より 追々

山崎長右衛門殿

埼玉県 教育史 第一巻

掲載資料（山崎家所蔵資料）



平田篤胤のいた山崎家の土蔵

たようにならせておいてある。また、篤胤と篤利とな
ったのは篤利が、篤胤の後妻を世話をしたことによる。後妻
は越谷の豆腐屋の娘で、篤利が親元となつて嫁がせてお
り、したがつて篤胤は、篤利を「婦翁君」と呼んでいる。

このような縁から篤胤は、しばしば越谷を訪れ、山崎家
に滞留しており、その宿泊した家屋は現在も同家に残され
ている。現在山崎家には篤胤関係の掛軸・短冊などとともに、
次の篤利の写本に対する添削がある。

一、みはしら

天御中主神は男か女か（篤利の筆）

男女かねたる御神にていとも妙なる御いはれあり、委く

古史伝に記せり（篤胤自筆）

戊文化十五年寅二月十六日申刻寫畢

二、俗神道論（續）

文政二年二月廿日夕方より廿一日朝までに篤利が家に宿

りてみづから訓點を加へて與ふるものなり篤胤（華押）

三、仏道大意(三)

文政二年二月廿七日山崎篤利が家に宿りて訓點を加へて
行十二月一日山崎是福（華押）

とく筆り（华押）

支山在流年（华押）

（华押）

海島（华押）

（华押）

平田篤胤の添削（越谷山崎氏蔵）

文政二年二月廿七日山崎篤利が家に宿りて畫後より訓點を
與ふる物なり 篤胤（華押）

四、俗神道辯論

文政二年壬四月十七日篤利が家に宿りて畫後より訓點畢

平田篤胤（華押）

五、医道大意

文政二年壬四月十八日篤胤が家に宿りて畫前に點付畢

平田篤胤（華押）

六、歌道大意

文政二年壬四月十八日篤胤（利）
が家に宿りて畫後より訓點畢

夢々人に傳ふべからず

平田篤胤（華押）

これらの書はいざれも篤利が、篤胤の著述を借りて略写
したものであるが、随分誤脱も多く、是を一晩の中にスッ
カリ朱筆で校正補修、仮名付けまでしている。地方門人に

(2) 篤胤婦人「おりせ」

平田家と山崎家の交際は、金錢関係のみでなく、縁戚関係の交際があつた。篤胤は、秋田の久保田城家臣大和田清兵衛の四男として長男常太郎早世、長女千枝・おてう(長)、晩年織瀬・鐵胤の妻。次男半兵衛・又五郎・義勝。おりせは、二人の子を残し文化九年三十一年にて赤貧のなか病死。生前くず紙のなかの古事記を拾い篤胤に精読を求めたの逸話あり。

再婚文化十五年下品川洗(新井)宿橋爪左四郎の妹三十四歳。名「お岩」。二カ月程で離婚。

再婚三人目夫人文政元年十一月越谷、豆腐屋の娘(名不詳)嫁して「おりせ」を名乗る。養父(親元)を山崎長右衛門美利、後の篤胤より十六歳年下。仲人小泉市衛門屋号「山一」自分の子はなし。初妻の子「千枝・てふ」と千枝と鐵胤との子(孫)四人の面倒を見

本居太平への篤胤書簡(文政六年)
女を娶り候、それより身上勝手向きの儀は、右女の在所より仕送り候に付き、勝手の暮らしが無差し支え。
おりせの先妻の子孫への慈しみは、手紙・日記に残る。特に篤胤の江戸払い後の思いやりには深いものがある。他人にはおてうはわが
子と書簡
内々申し入れ候、私事十五の正月おてうをうみ。弟は十一歳に亡くなり・・と

おりせの学問記録は、知られていないが、読み・書き・算盤はできた。書肆・板木屋・紙屋・製本屋の交渉にと經營に奔走した。

おてうの婿鉄胤伊予国新谷(にいや)藩臣碧川某の長子であつたが武士より学者を望んで文政五年篤胤に入門し、その学力をかわれて文政七年婿養子に迎えられた。(系図参照)

おりせの日記

「戴恩日記 天保十二辛丑年四月ヨリ 伊夫伎廻屋
(表紙篤胤筆・本文夫人筆 半紙二ツ折横帳)」

天保十二年(篤胤六十六歳・おりせ五十歳)四月五日 にら川(下野、仁良川、佐竹領)よりお立。天気 送りの者十六人・人足
十二人・上下べて三十二人 にら川(仁良川)より秋田

② 篤胤の著述差し止め江戸払いとおりせ

寛政二年（一七九〇）朱子学の林家要望により幕府松平定信は、朱子学以外の学問の禁止を発令した。いわゆる「寛政異学の禁」である。

平田篤胤の著述差し止め江戸払いは、天保十一年（一八四〇）の大晦日、老中（太田備後守資始）より佐竹藩留守居（佐竹右京太夫宛）に

佐竹右京太夫内 平田大角
右之者在所え差遣候様可被致候 且又是迄著述物等數多致し候趣に候得共 以來ハ差留可被申候

正月元日、平田大角（篤胤）は、佐竹江戸屋敷へ呼び出され、江戸退去著述差し止めが伝えられた。

江戸には、子供・孫等の家族を残し、篤胤は、妻 オリセ のみを伴い下僕市太郎をつれて、正月十一日江戸を出立した。当然宿泊地で有るべき越ヶ谷に迷惑をかけることを避けて、草加の宿に（五ツ半宿）宿をとった。

十二日、朝草加を出立した篤胤・オリセは、越谷油長・（長右衛門篤利没後を訪れ、豆腐屋（オリセ実家）・山一（小泉市右衛門）等家にて御暖ごい。幸手に泊まる。

十三日栗橋二番船で渡り、芋柄新田・萱橋を経て「仁良川」佐竹陣家にはいった。十三日は、節分「やよ鬼よ 汝にや 似るか江戸の人の 吾をし鬼と 鬼逐（やら）ひしつ」

持病を持つ二人、このまま厳寒雪の秋田の地へ赴くのは厳しいと、また、あまり江戸から離れたくないと思持ちから仁良川にしばらく滞在を決めた。

「若餅を貰い、孫等想う・小松や善右衛門の世を請ける」

仁良川から秋田の久保田へ

おりせの日記

（天保十二年（篤胤六十六歳・おりせ五十歳）四月五日 にら川（下野、仁良川、佐竹領）よりお立。天氣 送りの者十六人・人足十二人・上下にて三十二人 にら川（仁良川）より秋田 「朝鳥の 朝たつ我を群鳥のむらがり 祝ふけふの まどるか」

秋田久保田の生活・夫婦持病と鬱い乍ら、赦免をえて江戸に帰れる日をまつ生活

天保十四年九月十一日 篤胤 没す。「今日や まさか あたらこのよを」 城東 広沢山 に葬る (六十八歳)

天保十五年春 おりせ 江戸の鉄胤家族のもとに 身を寄せる。(この年十月伴信友没す七十四歳)

没後 広沢山 篤胤の脇に墓石をたてる。

おわりに

平田大角篤胤の榮枯の波乱は、また、山崎長右衛門家の榮枯の波乱でもあつた。

平田国学門人は、三千人余と言われる、この門人の内訳を見ると

篤胤 生存中の門人 (文化元年～天保十四年) 「東修門人」 五五六人

没後門人 (天保十五年～慶応三年) 「中等門人」

一三三〇人

一四二四人

総数 三三〇〇人

門人数からも推察出来るのは、平田国学の盛衰は社会背景にあることだ。林家独り占めの学問界で林家以外の学者は新たな学派を立てるしかない。それは違法という。新しい王政復古の氣運は、神を天皇に置き換え倒幕思想に平田国学を利用した。さらに富国強兵帝

國主義者は、大日本帝国主義の精神基盤にまで押し上げた。終戦一転して戦後民主主義の風潮のもとに再び非学問と卑下された。

越谷門人、いわゆる束修門人は、学者となり生計を立てようとしたわけではない。読み書きは、商人の生活の為の技術取得にあつたのだ。日光道中第三の宿場「町」が生活学習の必要を要求していたのだ。極端にいえば平田国学でなくとも考證国学派でもよかつた。ただ篤胤程の通信教育制度をもつた学者はいなかつた。ということである。ここに平田篤胤の近代庶民教育の萌芽があつたといえよう

近代学校の先駆をなしたというのは、帝国国学思想ではなく、庶民大衆教育の先駆であつたということである。
山崎長右衛門等越谷商人門人・學習者の學習の動機と価値を學問から庶民教育の學習の道を開いたとの視点で近代都市越谷の始点を見るこども出来るとおもうが



師木鳴也体心乎人

平篠龍

石上古川人同日人志多一
也詮御像三千代也

おのきう美下與三五人五五
大年我作鈴屋大人作肖像尔今於此書之多有
され一枚多矣此下之肖像子山崎萬利小鏡等也

ナリタス
第三回

唐人集

卷之三

卷之三

(前欠)
○どふぞ

御かもじ様 をかごにのせ申て

御つれ可被成候 御ばア様とも相談いたし候
どふぞ御つれ可被成候

○お千枝こと昨日よりむしけづき候由
申し来り 昨日御ばア様御出なされ候
今日など出産かも志れ 不申候

早々めで度

かしこ

(文政九年・一八二六)

カ
大角

折瀬ど

(包み表)
をりせ どの

大角より

師木嶋の倭心を 人とは、

朝日に にほう

平篤胤

(お婆ア様とは)

山 桜 花

宣

長

この手紙は、おりせが越ヶ谷(実家豆腐屋カ)に来て
いるおり、長女千枝が産気づき明日の出産かも知
れないので、お婆さん(おりせの母)を連れて早く江戸へ戻れとの手紙である。

折瀬・をりせ
織瀬・おりせ

宣長の門弟を志して篤胤は京に上つたが既に宣長没
(亨和元九月死)
自ら没後門人と称している。
山崎家に保存されている。

駿河母・長右衛門妻

(お婆ア様とは)

山 桜 花

宣

大角(篤胤)が相談している江戸のお婆ア様は、

駿河母

豆腐屋母

鉄胤(内蔵助)の母(碧川・駿河母)と呼ばれる人と思われる。

越谷の母を御駕籠にのせて連れてこい、といつて迎えるのは千枝の出産に立ち合わせるため、迎えの為の越谷下りであつたのだろう。

千枝の長女、篤胤(五一歳)の初孫「ふき」は、此の手紙通り 文政九年四月十二日丑の刻(午前二時)に生れた。

こは 我が師鈴屋大人の肖像に みつから書いてそへ
られし歌なるを 今この御像を山崎篤利に譲るとて
おのれかきて与ふるに なも

(平田鉄胤・内蔵助)

追日寒氣相募候得共 御揃弥御壯健ニ可被成候 又御目出度御儀奉存候 次ニ当方一同の息才ニ罷在候間乍憚御安意可被下候 拶ハ先達て御咄し申し候 烏の啼やうを聞分る人 福地忠兵衛と申仁国元へ帰りがけ其御地通行いたし候ニ付書状相添參上いたさせ申し候 御慰ニ御聞可被成候 ゆるく御とめ置被成候ても宜敷御座候將又子息も同道ニ御座候が此児殊の外絵の上手ニ御座候間御好ミ御書せ御覽可被成候

一その後ハ大ニ無さた申し上真平御免可被成候何卒私毫人なり共上り度ハ 存じ居候得共短日ゆヘ学事殊の外世話數只々上り度心ニ存居る計リニ御座候

一例年之通り稻穂御願い申し度奉存候 御地より御幸便御座候ハ、御事伝可被下此方よりも其内ニハ御願ニ差上可申何レとも幸便次第奉書上候

一丹事十月頃ニハ緩々泊リニ上り可申 兼々存居り候処 兔角癩氣少々起相勝れ不申何分出兼申候て御無沙汰ニ相成り申し候 乍去何も御氣遣被下程の事ニハ、御座候間 此段ハ御氣遣被下問敷候 先は烏の人さし上候ニ付き用事旁々一筆申し上候差急キ乱略之書面御宥覽可被下候 以上

又申し上候 此の鳥の人至つて心安き人ニ御座候間其思召にて御あしらひ可被下候以上

返し丹事差たる事ニハ、無御座候間必々御案被下まじく御見廻等之儀 決して御捨可被下候間為念申し上置候 以上

十一月二十六日 平田内蔵助

御兩人様 御許ニ

尚々両親初一同宣申上旨申聞候 拶又御序も御座候豆腐屋へ宣奉希候追追寒氣強相盛可申候間折角御厭可被下候
「文政三年七月千枝は、名を「お長(てふ)」と改む。七年碧川鉄胤(内蔵助・篤真どもある)を養子に迎える。九年四月十二日の初子がふきである。十二年正月没。」